

# 「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察

—中学校における実践から—

(平成 27 年 8 月 27 日受付, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

A Study on “Life Education” that is the root of “Humanistic Education”  
—From practice in junior high school—

奈良学園大学人間教育学部

瀧明 知恵子

TAKIAKI Chieko

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：中学校教育, 人間教育, いのちの教育, 自尊感情, 意識調査, 道徳教育

**Abstract** : A review on the education of life aiming to raise hopes to live on. From a practical lesson at middle school. This research has attempted to examine how teachers can practice and confirm five educational aspects derived from an analysis of the results of the emotion-related questionnaire survey” held in 2013 to check the awareness of life. Before and after the practical lesson at middle school concerning life, researchers carried out the questionnaire survey. In a comparative analysis thereafter, they reviewed the cross tabulation on the question: “Have you ever felt from the bottom of your heart that life is essential to everyone?” As a result, this research could confirm the emotional behavior of many students and get hold of positive effects, based on the cross tabulation, and comments and opinions of teachers and students involved. The research presents a curriculum of “education on life” at middle school, prepared from the results of the survey.

**Keywords** : Junior high school education, Humanistic Education, Life Education, Self-esteem, Awareness survey, Moral teaching

## I 研究の目的と方向

### 1. 問題の所在

中学校現場では日々、懸命な取り組みが行われているが、今日においても、陰湿な「いじめ」が子どもの自殺という悲劇的状况を招いているなど、命が軽んじられるような実状が存在する。子どもたちの自殺や障害暴力事件の発生等の現象に対して、その対応が模索され続けている。

国際化・情報化の状況が急速に進展し、マスメディアの発達と普及、コンピュータの活用の飛躍的進展等、生徒たちを取り巻く環境は大きく変化してきた。

かつてに比べて様々な規範意識の低下や共同体における繋がりが低下していると感じている。特に中学校時代は自我に目覚め、身も心も急激に発達し知的・情動的な興味も高まる時期であり、ともすれば、劣等感、無気力、無関心に陥りがちである。

2012年、文部科学省は「子どもの「命」を守るために」において、いじめや学校安全等の問題に対して、いつまでもどのようなことに取り組むのかを示す総合的な取組方針を取りまとめている。子どもの「命」としっかりと向き合い、家庭・地域そして社会と一丸となって取り組んでいくことを訴えかけているのである<sup>1)</sup>。

そういった中で、生徒一人ひとりが自分の命を大切

に思い、他者やあらゆる生き物の命を大切にすることを育んでいくことは「人間教育」の根源とも言える。

梶田叡一は「人間教育とは、何よりもまず「人間」という名に値する高次なあり方を目指す教育であり、教育基本法の第1条の冒頭に規定されている「人間は人格の完成を目指し」という文言に対応するものである。」また、「我々の世界」「我的世界」を生きる力を考えることが不可欠の課題であると述べている<sup>2)</sup>。

そして、「いのちの教育」においては、レゾン・デートル（存在理由）を認識させる3つのレベルについて述べている。「第1は<いのち>を粗末にする悲しむべき風潮が現代日本社会に存在する、ということであり、その是正のためにこそ<いのち>の教育が必要である。第2は人として最も本質的な認識に関わる課題として<いのち>の教育を考えるということであり、<いのち>という現象について理解を深め、それを基盤として自分自身の生き方の基本を考えるということである。第3のレベルは、<いのち>を慈しみ、<いのち>の尊厳を踏まえ、最大限の開花発現を重視する、真の「共生社会」「自己実現社会」ではないか。」である<sup>3)</sup>。

本稿では、この3つのレゾン・デートルを基盤として、「いのちの教育」を進め深めていくために、学校教育において、どのような内容で、どのように行っていくことが望ましいのか、調査を通して考察するものである。

## 2. 研究の目的と方法

兵庫県教育委員会は2005年、『「命の大切さ」を実感させる教育への提言(第1版)』を打ち出し、そこで梶田叡一は「教育の究極的な目標は人間のあり方そのものの成長である。子どもたちが命を大切にしたい生き方ができるよう、教師各自があらゆる学習指導の機会を通じて、子どもたちの生き方に影響を与える教育実践をしていかなければならない。」と述べている<sup>4)</sup>。

2006年には『「いのちの大切さ」を実感させる教育プログラム』の開発と実践事例集が出され、県内の各学校における「いのちの教育」の実践教育活動として普及定着が図られてきた<sup>5)</sup>。

これらの取り組みを基盤として2009年に「いのちの教育実践研究会」(顧問・梶田叡一奈良学園大学学長、理事長・近藤靖弘元兵庫県教育委員会教育次長)が立ち上げられた。2012年からは研究組織として3つの部会(①命の教育部会、②学校安全・防災教育部会、③道徳教育部会)を再編成し研究実践を進めてき

ている。

本稿は①命の教育部会における研究の成果をまとめている。まず、本部会において作成した「2013年『いのち』に関わる意識調査『ころろに関するアンケート』」を実施し、興味深いデータを収集することができた。

本調査は2013年、科学研究費助成事業・基盤研究(B)課題番号24330254研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」(研究代表者：梶田叡一)に基づき進めたものである。

H県・M県下の小学生(n=374)・中学生(n=361)・高校生(n=1068)の「いのち」に対する意識の実態を把握する目的で、2013年9月5日～10月4日に実施した。

クロス集計を実施し、結果分析する中から、5つの「いのちの大切さ」を実感させる教育プログラムの視点を導き出した。

<2013年実施「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ)におけるクロス集計結果>

- ①自分自身に良いところがあると実感できる子は、いのちの大切さを実感できる。
- ②周りの人に支えられていると実感できる子は、いのちの大切さを実感できる。
- ③得意なことがあると思える子は、いのちの大切さを実感できる。
- ④努力すれば報われると認識している子は、いのちの大切さを実感できる。
- ⑤新しいことに挑戦し、自分の可能性を広げたいと考えられる子はいのちの大切さを実感できる。

次の段階として、上記の結果を生かして、これらの視点がどのような授業等教育実践で確かめられるのかを検証するため、小・中・高等学校における発達段階に応じた「いのちの大切さ」を実感させる実践研究を展開することとした。本稿では中学校現場における実践研究について考察するとともに、これらを活かし「生きる喜び」と「いのちの大切さ」を実感させる教育カリキュラムモデルを開発する。

## II 実践研究の概要

### 1. 実践校の概要

調査校である兵庫県西宮市立山口中学校は西宮市の北部に位置している。同校周辺は20年前頃までは農村地帯であったが、宅地開発が急激に進み、一時的に住民が増加した地域である。旧村と新宅地の異なる文

化を持つ小学校2校から入学した様々な背景を持つ生徒たちが中学校で交流し影響し合っている。旧村には多くの自治会主催の祭りがあるなど、地域の交流は活発であり、つながりは深い。山口中学校主催の体育的行事、文化的行事では多くの参観者が訪れ、地元の老人会や婦人会と一緒に地域の踊りを披露する場面もある。校区内に児童養護施設があり、定期的に教師が訪問し、学習会を実施しながら子どもたちとのふれあいを大切にしている。

学校教育目標は「自ら学び、確かな学力を身につけ、豊かな心でたくましく生きる生徒の育成」であり、「学力向上」が課題である。これまで、全教員の共通理解のもと、規範意識を高め、生活習慣の建て直しを図ってきている。研究主題を「家庭・地域と共に子どもを育てる道德教育の推進」と設定し、生徒に「自己有用感」を持たせること、「教師の指導力向上」を目標とし、道德教育に力を入れ、学級経営、教科指導、生徒指導等、あらゆる場面での指導にあたっている。

## 2. 中学校現場における実践研究の手順

中学校において「2013年『いのち』に関わる意識調査『ころに関するアンケート』を、「いのちの大切さ」を実感させる5つの視点を基盤とする「いのち」に関わる授業実践の前後に実施し、アンケート結果をクロス集計したものを比較調査した。「いのちの大切さを実感させる取り組み」が生徒の心の持ち様に、いかに有効に働くかを観るためである。また、「生きる喜び」と「いのちの大切さ」を実感させる教育カリキュラムモデルを開発することをねらいとした。

以下のような手順で実施する。

- (1) 第1回「心のアンケート」実施
- (2) 2013年実施の「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ)におけるクロス集計結果内容を反映させた実践「ホメホメシャワー」実施
- (3) 道德 兵庫県道德副読本「心かがやく」より『語りかける目』
- (4) 2013年実施の「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ)におけるクロス集計結果内容を反映させた実践『『ありがとう』と言われる一日をすごそう』
- (5) 第2回「心のアンケート」実施
- (6) 2回の「心のアンケート」の集約、その比較調査を行う。
- (7) 一連の取り組みの分析・考察を行う。

教育課程上においては、学活・道德・総合的な学習の時間に位置付ける。

### 「ホメホメシャワー」

目的 : 自尊感情、自己有用感を育む

「クラスの友だちの良いところを考え、カードに書き、相手に伝える」ということを、班の中で行い、クラスの仲間へと広げ、ゲーム的に実施する。友だちをあたたかい目で見つめ、自分の良さを再発見する機会になる取り組みである。

『『ありがとう』と言われる一日をすごそう』

目的 : 自尊感情、自己有用感を育む

朝の短学活に担任が語りかけ、終学活では、思いやりのある一日が過ごせたか問いかける。生徒に自分の名前が家族のあたたかい愛情の証しであることに気付かせ、自分を大切にするとともに友達や周りの人もかけがえのない存在であると感じさせる取り組みである。

## III 実践内容

### 1. 「いのち」にかかわる学活での取り組み

2013年実施の「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ)におけるクロス集計結果内容を反映させた実践

(1)対象者

2年生1組35人、2組35人、3組35人、4組36人、5組35人、計176人

(2)実施日

① 2115.11.5(水)～11.12(水)

② 2115.11.17(月)～11.21(金)

(3)内容

①「ホメホメシャワー」

今回、「ホメホメシャワー」をまず各班で行った。そしてそのあと、男女の出席番号ごとの交換、次に、各委員会各係での相互交換、そして同じ誕生日の人同士、という指示を順に出していった。生徒たちは予想以上に反応よく、積極的に人と関わろうとした。1年でも、「ホメホメシャワー」を取り入れたが、子どもたちの反応は大変良く、中学2年では、「ジョハリの窓」、「自己観照」という教材等をつかい自分を見つめる機会を作る。そして、今回の自尊感情を育む時間の設定を行い、大変意義ある時間となる。

②『『ありがとう』と言われる一日をすごそう』

<朝の学活にて>

担任より「地震が長野でありました。本当に私たちの命は生かされている。今日一日、『ありがとう』と言われる日をすごしてほしい」

<終学活にて>

「『ありがとう』と言われましたか、あなたがいてくれて、『うれしい』と思っている人がいます。私もその一人です。あなたの名前はあなたへの思いが込められているのです。」

最後に、朝日新聞「私は生かされた子」を読み聞かせる。記事の内容は、「病院で保護された赤ちゃん」だった女性の新聞記事の紹介である。生かされた命に感謝する話を通して、環境のせいにならずに、自分の命を感謝する思いから、たくましく生きておられる様子が感じられる文章である。

かけがえのない命を大切にすることを育むとともに、自分の命に感謝することから、自尊感情を育んでいきたい。

期間中、各担任が上記のような「『ありがとう』と言われる日をすごしてほしい」について、自分自身の体験などから、朝の学活・終学活において話をしたり、資料を用いて、考えさせる時間をもつ。

## 2. 「いのち」にかかわる道徳学習指導案

作成者 西宮市立山口中学校

道徳担当 眞鍋美穂

### (1)対象者

2年生1組35人、2組35人、3組35人、  
4組36人、5組35人、計176人

### (2)授業日

平成26年11月14日(金) 1時間目

### (3)ねらい：命の尊さについて考えさせる。

(4)おさえ：命は永遠でなく、限られたものであるからこそ尊いものである。自然の驚異を通じて「私たちは生かされている」ということ、「命のつながり」という親から託された大切な命であることを自覚させ、だからこそ充実した生き方を考えていくことが大切であると導きたい。

### (5)教材：兵庫県道徳副読本「心かがやく」

P46『語りかける目』

『語りかける目』あらすじ

ある警察官の手記である。震災後、救助活動の中で、ひざの前に置いた、焼け焦げた「ナベ」にじっと見入っ

ていた一人の少女に出会う。「ナベ」の中は、少女が拾い集めた母の遺骨であるという。

その夜(一月一六日)も少女は母に抱かれるように、一階の居間で眠っていた。気がついたときには母とともに壊れた家の下敷きになっていた。何時間もかけて脱出した後、母を探し当てた時、手が血まみれになっていることに気がついた。「ありがとう。もう逃げなさい。」と、母は握っていた手を放した。夢中で逃げた。その後、少女は一人で母を探し求め、いま一人で、見つけた母を「ナベ」に入れ、守り続けている。

### (6)教材観

本校の学校教育目標のもと、現在「学力向上」が課題である。これまで、規範意識を高め、生活習慣の立て直しを図ってきたが、学力の底上げには「自分自身を大切にしたい」「こうありたい」という自尊感情が欠かせない。スポーツに、学習に、そして生きることそのものに意欲をもつことが子どもの力を発揮させる一番の原動力になる。自尊感情は、「親子関係」も大きく影響しているが、誰しも悩み傷つきながら成長するものである。思春期真っ只中の生徒たちの胸中は、成績の伸び悩みやコンプレックス、親子関係の悩みに苛まれている者が多い。様々な環境で育ってきた生徒たちであるが、この教材は、どの生徒にも「命の尊さ」に気づかせることのできる教材である。また、自分の命は生かされていること、周りの多くの想いに支えられ、その想いに気づくことで、自分の命をも尊く思え自尊感情を高めることができる教材である。

### (7)指導観

教材の少女は震災という厳しい状況下において、たくましく生きていかなければならなかった。その前向きな気持ちを支えたのは「母の想い」である。生徒を少女のきもちに寄り添わせながら、「生きて」という強い「想い」を誰しも受けついでいるという「命の伝承」への気づきにつなげたい。また、この教材を通して、「生かされている命」について考えさせたい。だからこそ「命は尊い」ことを生徒たちに考えさせたい。自分の命もまた、一人では決して育ってこなかったことに気づかせることで、周りへの感謝が生まれ、自分の命が守られてきた環境を見つめ直すことで、大切な自分を自覚し、自尊感情を育くめると考える。



<本時の展開>

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「胎児の超音波写真」をみる。</li> <li>・当たり前の日常風景の写真をみる。</li> <li>・ワークシート記入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真を見て考える。8週目には心臓ができる。12週で小さな手足をばたつかせる。(十月十日お腹の中で大切に育まれる命)</li> <li>・自分についても、これまでの生き立ちを振り返り、自分一人では成長して来なかったことについて振り返る。</li> <li>・ワークシートを配布し、記入する。&lt;資料2&gt;</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・超音波写真での赤ちゃんの写真から生命の神秘や尊さに触れる。</li> <li>・一人で成長したのでなく人々に支えられ成長してきたことを感じる。</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「語りかける目」を読む</li> <li>・震災の恐ろしさを知る。</li> <li>・日常の平和が一瞬にして奪われてしまう悲しみ、つらさを感じる。</li> <li>・命の大切さについて考える。</li> <li>・死を目の当たりにした少女の気持ちはどんなものか考える。</li> <li>・言葉はなくとも、単なる同情ではなく、心から応援する時の心情に触れる。</li> <li>・現実を正面から受け止め、生きていくことについて考える。</li> <li>・命を繋ぐこと、命を生かすことについて考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本文を読む</li> <li>○震災当時、どんな状況だったか</li> <li>・地震の痛ましい状況をおさえる。</li> <li>○「おかあさん、おかあさん」と手を握り締め、叫ぶ少女は母とこれまで、どんな生活があったのだろうか。</li> <li>母はか細い声で少女に何と言ったと思いますか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→「もう逃げて」「元気でね」</li> <li>「母さんの分まで生きなさい」</li> <li>「あなただけでも助かって」・・・。</li> </ul> </li> <li>○P48 2行目「声も 涙も出なかった」とは、なぜだろうか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→「悲しみが大きすぎる」「現実を受け止めることができない」</li> </ul> </li> <li>○P48 5行目「見つけ出した母を鍋に入れ」とは、母はどうなったのか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→母親は焼けて亡くなってしまった。</li> </ul> </li> <li>○警察官である私は「激励の言葉も何も言えなかった」「少女の前を逃げた」のはどうしてか？ <ul style="list-style-type: none"> <li>→少女の現実があまりにも悲惨で、かける言葉が見つからない。</li> <li>→ほかに沢山仕事があった。</li> <li>→口先だけの励ましをかけても意味ないと思った。</li> <li>→言葉をかけたところで悲しみは癒えない。</li> </ul> </li> <li>○P48 12行目「・・・その目は、もっと多くのことを私に語りかけ、今も語り続けている」とあるが、どんな目でしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→強いまなざし →意志ある目</li> </ul> </li> <li>◎どういう事を語っているのだと思いますか？ <ul style="list-style-type: none"> <li>→悲しみを背負い生きていく決意</li> <li>「母の分まで生きていく」</li> <li>「負けない」「一人でもしっかり生きていかなければ」「母の思い(生きてほしい)を忘れない」</li> </ul> </li> <li>○そう思えたのはなぜだろう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→「母が生んでくれた命」を大切にしたい。」</li> <li>→母の死は理不尽だが、母が自分託した。命を粗末にしたくない。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師が静かに読む。</li> <li>・読み終えた後、阪神大震災当時の実話であることを確認する。</li> <li>・できるだけ多くの日常の場面を切り抜いて答えさせたい。(一緒にお風呂に入ったこと、ご飯を食べたこと、買い物に行ったこと・・・)(2人暮らしだったのだろう)</li> <li>・母のセリフ「ありがとう。もう逃げなさい。」を隠しておく。</li> <li>※母の言葉だけでなく、母の思い(子どもには生きてほしい)に触れる。</li> <li>・ショックの大きさを考えさせる。</li> <li>・お母さんは火事でやけてしまい骨になってしまった事を確認。</li> <li>・言葉はかけられなかったが、心から少女の今後の幸せを願う気持ちに触れる。</li> <li>・「逃げた」とあるのは彼女の悲しみを背負うことができないことの意味。</li> <li>・「目は生きていた・・・」から、凜とした強いまなざしであり、現実を受けとめ一人で生きていかなければならないという少女の決意を押さえない。</li> <li>中心発問</li> <li>・最後の文に「少女の名前を聞くのを忘れていた」とある、目に引き込まれるほどの意思があったと推察できる。</li> <li>・命はつないでいくもの」であることに気付かせ、「命を生かすこと」について考えさせる。</li> </ul>
終末	<ul style="list-style-type: none"> <li>まとめとして手紙を書く</li> <li>詩を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○震災後、17年経った今、27歳くらいになっているであろうか。少女に手紙を書く。</li> <li>○「命」の詩を静かに読む。&lt;資料1&gt;</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少女のその後を想像させ、書かせる。</li> <li>・余韻を残す。</li> </ul>

<資料1>

「命」 小学4年生  
 命はとても大切だ  
 人間が生きるための電池みたいだ  
 でも電池はいつか切れる  
 命もいつかはなくなる  
 電池はすぐにとりかえられるけど  
 命はそう簡単にはとりかえられない  
 何年も何年も  
 月日がたってやっと  
 神様から与えられるものだ  
 命がないと人間は生きられない  
 でも  
 「命なんかいらない。」  
 と言って  
 命をむだにする人もいる  
 まだたくさんの命が見つかるのに  
 そんな人を見ると悲しくなる  
 命は休むことなく働いているのに  
 だから 私は命が疲れたと言うまで  
 せいっぱい生きよう

3. 語りかける目とはどんな目でしょう。

4. その目はどんなことを語っているのでしょうか。

5. 17年後の今、当時の少女はどのように過ごしていると思いますか。

<資料2>

<ワークシート>

2年道徳「語りかける目」

1. 生まれて泣くしかできなかった自分の成長をこれまで支えてくれた人がいるのだろう。

親	病院の 先生	近所 の人	親戚 の人	保育園 の先生
---	-----------	----------	----------	------------

2. お母さんは最後に何と言って手を離したのでしょうか。

6. 手紙を書こう

( )組 ( )番 : 名前  
 ( )

#### IV 分析と考察

今回の「いのちに関わる教育」の実践の中で、自尊感情を育むための、「ホメホメシャワー」において、生徒たちは、嬉しそうに活動していたようである。自分からカードを持って相手の所に行きながら、ゲームのようにどんどん盛り上がる。

生徒が1年生の際にも、クラス全員でカードを順番に回す「ホメホメシャワー」を実施しているが、子どもたちの反応は大変良く、学期の終わりには「またするの？しょうよ！」という声があがっていたという。

2年生になり、読み物教材等を使用し自分を見つける機会を作っており、今回の自尊感情を育む時間の設定とともに意義ある時間であったようだ。

取り組みの後、指導にあたった各担任は、生徒たちの表情が、やわらいできていると感じている。

班活動において、仲よく協力する姿や、個人ノートなどに「まわりの友だちや家族に感謝の思い」や「優しい気持ち」を書いている生徒も、これまで以上に出てきているということである。

日常の学校生活において各教師はほめることを意識しているが、子どもたち自身は誉められているという意識は低い。むしろ、日々の生活の中で、思春期独特である他人との比較や、成績の在りようで、劣等感を持ちやすい傾向にある。その中では、教師からの評価よりも、仲間からの称賛や声かけが大きく影響するのである。そういった中で、良いこと探しをすることで、お互いが自分の良さを見つめ、自分を肯定的に捉えられるようになり、自尊心を育む機会になったと考える。また、言葉が人を元気づけたり、傷つけたりする力があることを考えさせる機会になったとも言える。生徒たちの感想や、その後の活動の様子からうかがえる。

ほめられる機会や互いに「ありがとう」という機を設定することで、生徒たちの自己肯定感が高まったと指導にあたった教師は感じている。そして、積極的に自ら人と関わろうとする意欲につながったのではないかと、という感想を持っている。

本学校では今後、さらに仲間との交流や経験を通して、自己有用感を感じさせることで自尊感情を高めていくということである。

次に、「『いのち』」にかかわる道徳の授業では取り組み後、自己評価とともに感想・意見をまとめさせている。その結果、多くの生徒がかけがえのない命の重さを実感している様子が見える。以下、取り組みを

終えての生徒の感想・意見を紹介する。

・「この女の子とお母さんも当たり前を送ってきたと思うけれど、地震により一瞬にしてその生活がなくなってしまい、女の子はこれからお母さんの分の命も大切にして生きていかなければならない。命を自ら捨てたりすることは決してないと思いました。」「自分の親がいなくなったらと考えて、どんな自分になるか想像できないけれど、私は絶対泣き続けると思います。一人の命が誕生するだけでもすごいのに大きく育っている。たくさんの方がいるのに父と母が出会って私が生まれた。とてもすごいことだと感じました。」など、死別の哀しみに思いをめぐらせることによって自他の命を大切にしようとする気持ちが芽生えている。

・「自分が生きて生活している世界は奇跡だと思います。何不自由なく毎日が過ぎていくことは当たり前のように当たり前じゃあない。そして人間だから生きて死んでしまうけれど、一回生まれた命はたった一度きりの人生。無駄に一日を過ごすのでは無く、いろいろなことに感謝して生きていきたいと思いました。」「一瞬でも今を無駄にしてはいけないなと思いました。今を大切に生きることが大事なんだと思います。命はひとつしかないし、同じものがあるわけではない。今まで育ててくれた人に感謝をして今を過ごしたいなと思いました。」など、まわりの人たちへの感謝の思いを新たに、たくさんの人に支えられてきた大切な命であることを多くの生徒が感じている。

・「世の中にはいろんな人生があって生きてくても生きられなかった人や、たくさんの人に支えられから、生きている人がいるんだと思いました。私もたくさんの人に支えられて生きているから恩返しをしたり、一生懸命生きていこうと思いました。」「もしも平和な日々が突然終わったら、どうなるのだろう、それから自分は前向きに過ごしていけるだろうかと思った。そういうことを考えるとくい残らないように、一日一日を意味のある日にしたいと思った。」という感想もあり、命の大切さを実感するとともに、前向きにしっかり生きていこうという決意が感じられる。

「いのち」をテーマにした学びの中で、身近な人の死に直面しているといった体験から、不安定な状態になる生徒もある。生徒一人一人の様子を把握し、保健室で待機させるなど、きめ細かな対応が必要である。筆者自身、かつて道徳の研究授業において、突然泣き出した生徒に遭遇したことがある。家族の死を思い出したためであった。担任を中心に養護教諭やカウンセ

ラー、家庭との連絡を行いながら、あたたかい配慮のもと、取り組みを進めていかねばと考える。

指導にあたった教員からの意見を紹介する。「学びの後の表情は良いが、なかなか思いが持続しない。」「親子関係や家庭環境が生徒の心の在りように大きく関係している。大変感性豊かな時期であり、環境に左右されやすいと思う。」など。また、道徳担当教員からの意見を紹介する。「日々の生活の中で、家庭環境など辛いことに負けてしまっている。生徒たちに安心材料を与えてやりたい。デリケートな面があるため、逞しさを身につけさせるとともに心の耕しを行いたい。自分自身が見守られている、支えられている、という自覚が少ないと感じているので、しっかり自覚させることで、今の自分があるありがたさ、自分の命があることへの感謝の思いを持たせたい。」「また、今後いっそう、生徒同士のかかわりの時間を増やし、認めあえる人間関係の中で「仲間もすごい！自分もすごい！」と思える教材を開発していきたい。」と述べている。

こういった日々の取り組みが、心豊かで、心身ともにたくましく生きる人間の育成につながっているのである。

今回の教育実践における観察やその後の感想・意見から、「いのちの大切さ」を実感として捉えている子どもの姿がうかがえ、その積み重ねが大事であると認識することができた。

山口中学校における「いのちの大切さ」を実感させる実践研究にあたって、協力を得て、アンケート調査を、一連の取り組み前と取り組み後に実施することができた。今回の2回の「心のアンケート」の比較調査において、「『本当に人のいのちは大切なんだ！』と心の底から感じたことがありますか」とのクロス集計において考察を試みた。(図1)短期間の取り組みのため、顕著な結果は期待されないが、いくつかの項目で、生徒の心の動きがあるであろうと考えた。まず、「これまで『いのちの大切さ』についてだれかに教えてもらった記憶がありますか」では、<教えてもらった>と答えた生徒のうち、「『本当に人のいのちは大切なんだ！』と心の底から感じたことがありますか」において<ある>との回答は、取り組み前では46%であったが、取り組み後では68%となっている。生徒の心を動かす取り組みであったと言える。

次に「今までに自分が生きていることに対して、感謝の気持ちを持ったことがありますか」では、54%であったものが63%となっており、「わたしは、先生や友達、家族など周りの人に支えられていることに感謝

している」では、31%であったものが42%となっている。命の尊さを理解し、自分の命を支えてもらっていることに感謝の思いを抱かせることができたのではないかと考える。生徒の感想の中にも感謝の思いが綴られている文章が多く見られた。また、「自分が保護者(親)に愛されていると思っていますか。」では、32%であったものが56%となっており、保護者の思いを感じ取ることで、自尊感情が高まっているものと考ええる。実践を通し、その有益性を検討し、さらに「いのちの教育」を推進していきたい。

## V 結論

学校現場に長年勤務してきた者として学校教育に「いのちの教育」は欠かすことのできないものと痛感している。様々な環境に育つ生徒たちに、命は一人だけのものではなく、繋がっているということを実感させ、かけがえのない命を未来へつないでいこうとする思いを持たせたい。取り組み後、多くの生徒の心の動きを、指導した教師は実感している。しかしながら、日々の生活の中で、ともしれば、培ったあたたかい思いは薄れてしまいがちなのである。だからこそ、繰り返し、様々な機会に育んでいきたいのである。

これらの取り組みの中で「いのちの教育部会」では、幼・小・中・高等学校において、成長に応じたカリキュラムを作成することができた。中学校のカリキュラムは筆者が担当した。(図2)<sup>6)</sup>

発達段階に応じたねらいを設定しており、中学校においては「自分の成長を振り返り、自分自身の存在に感謝し、喜びを感じさせる。また、かけがえのない命を未来につないでいこうとする思いを持たせる。」とした。

本比較調査は第1回目であり、今後、調査を何回か重ねるとともに、取り組みを行った学級、行わなかった学級での比較調査などを行っていくことで、より有意性のある結果を示すことができると考える。

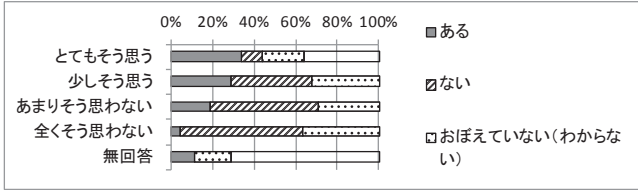
今回の実践研究において、様々な取り組みが命の大切さを考えることにつながっていくことを現場の指導者が感じている。「いのちの教育」は日常の学校生活の中に数多く存在する。各教科の学習の中や学校生活の中で、良い教材を取り上げ生徒たちと共に考え合い、普段から教師自身が感性を磨いておくことが必要である。指導者自身が感動をもった題材を与えて、生徒の視点に立った教材研究を深めていくことである。限られた時間の中で、読み物教材だけの理解にとどま



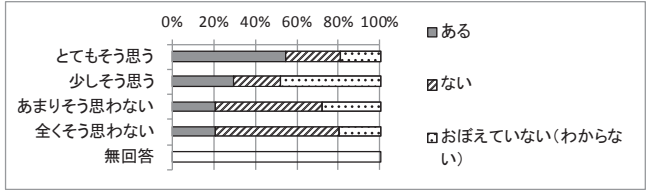
図1) 調査データ作成者・関西学院大学教育学部 鈞 由布子 『『本当に人のいのちは大切なんだ!』と心の底から感じたことがありますか』とのクロス集計<取り組み前・取り組み後>

<図1>

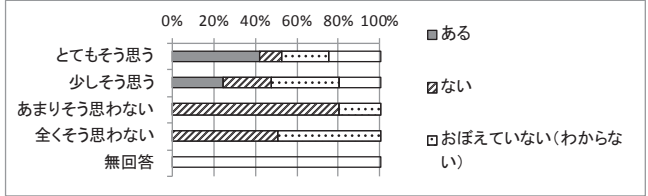
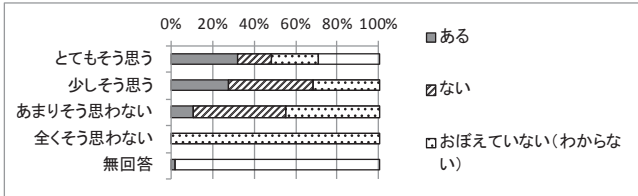
自分が保護者(親)に愛されていると思っていますか。



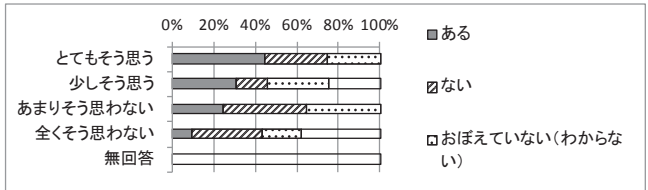
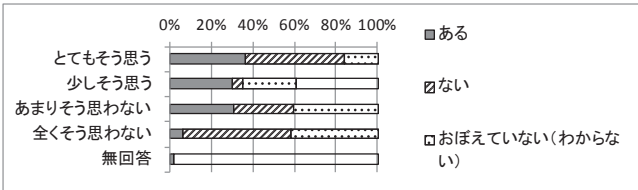
後



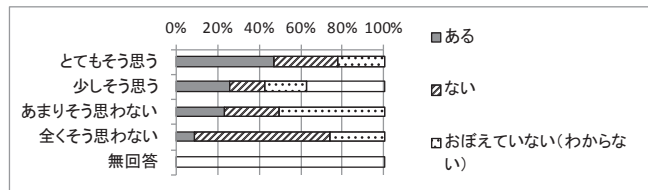
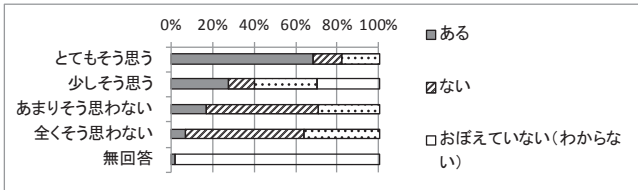
わたしは、先生や友達、家族など周りの人に支えられていることに感謝している。



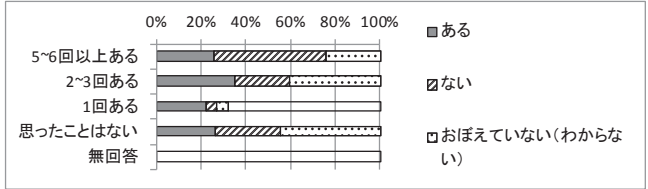
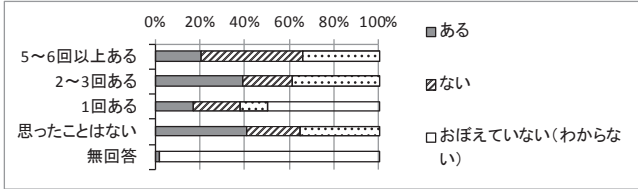
わたしには、得意なことがあります。



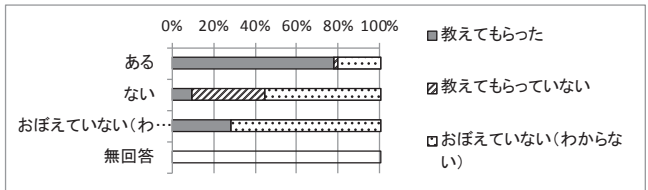
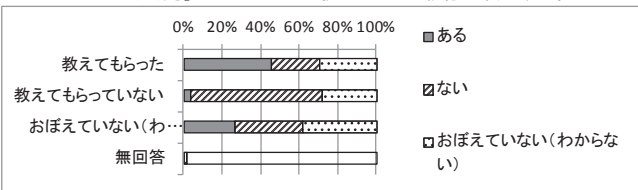
わたしには、その時その場で自分なりに精いっぱい努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いない、と考えています。



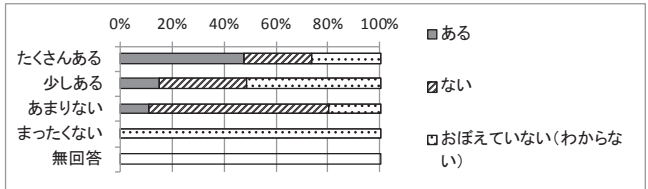
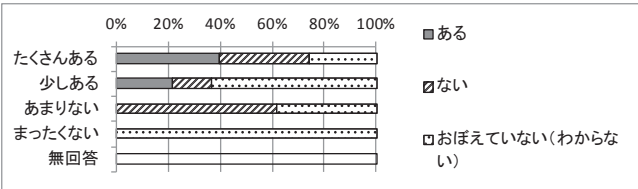
今までに人とけんかをしたり、嫌がらせをされたり、腹が立つことがあった時「死んでいくなればいいのに」と思ったことがありますか。



これまで「いのちの大切さ」についてだれかに教えてもらった記憶がありますか。



今までに心の底から「楽しかったこと」や「うれしかったこと」がありますか。



今までに自分が生きていることに対して、感謝の気持ちを持ったことがありますか。

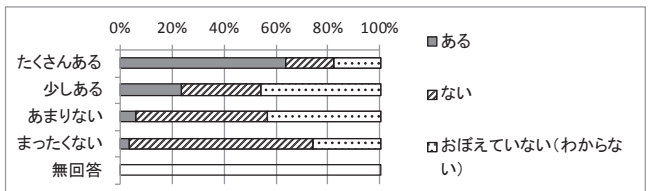
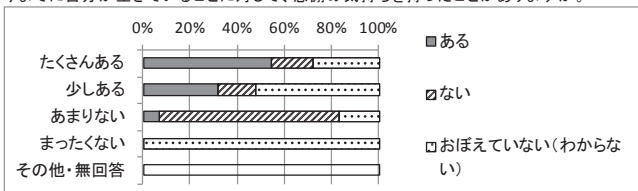


図2)【中学校】瀧明 知恵子

目標	○自分の成長を振り返り、自分自身の存在に感謝し、喜びを感じさせる。また、かけがえのない命を未来へつないでいこうとする思いを持たせる。		
	学習活動	指導上の留意点	教育課程上の位置付け
一 学 期	① 学級集団づくり ② 健康な身体づくり ③ 自分史づくり ④ いいところ探し (自己肯定感育成) ⑤ 職場体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支え合い高め合う豊かな人間関係づくり</li> <li>・ 健康・安全についての理解 (心もからだも元気で)、AED を用いた心肺蘇生法等</li> <li>・ 思い出の品物・写真、お世話になった人、感動体験等、自己の成長を感じさせ、多くの人の支えに感謝の思いをもたせる。</li> <li>・ 班活動の中で行うなど、仲間の支持を得ることで、自尊感情を育てる。</li> <li>・ トライやるウイーク (兵庫県) 等、学校から社会へと活動場面を広げる。</li> </ul>	道徳 保健体育 総合的な学習の時間 特別活動 総合的な学習の時間
二 学 期	① 食生活と自立 ② 仲間との協力 ③ 幼児・お年寄りとのふれあい体験 ④ いじめに向き合うために ⑤ いいところ探し (自己肯定感育成)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 食生活と栄養、日常食の調理など、健康に良い食習慣について考えさせる。</li> <li>・ 体育的・文化的行事など励まし合い協力して創りあげる体験活動を充実させる。</li> <li>・ 幼児、お年寄りとのふれあい体験 (行事での交流) 優しい心・他者とのつながりを感じさせる。</li> <li>・ いじめをテーマにした読み物教材等、いじめない、いじめられない人間関係を築く力を養う。</li> <li>・ 人を元気づける言葉、傷つける言葉を考えさせ心を育む。友だちの良いところを伝えあう。</li> </ul>	家庭科 道徳 保健体育 音楽科 特別活動 道徳 総合的な学習の時間 特別活動
三 学 期	① 大震災から学ぶ命の重みを考える ② 身体や性について ③ 健康と生活習慣について考える ④ 未来の自分史づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自他の命のかけがえのなさ人とつながりを実感させる。ゲストティーチャーの話、教材「語りかける目」兵庫県版道徳教材など、</li> <li>・ 第2次性徴、商品としての性情報の見方、出産と中絶、AIDS についてなど、学年の成長に応じて実施する。</li> <li>・ 喫煙・飲酒、薬物乱用など、命を脅かす行為について理解させる。</li> <li>・ 「将来の夢」「未来への希望・願い」等、自分らしさを生かした生き方を考えさせ、自分の人生を生きていこうとする力の育成</li> </ul>	道徳 保健体育 保健体育 特別活動 総合的な学習の時間

らず、「体験」を伴った経験ができるよう計画的に行いたいものである。

本来、家庭や地域で「いのちに関わる教育」は行われてきているはずだが、昨今、ともすれば「いのち」が軽んじられる風潮がある中で、学校教育は組織的、計画的に行っていくことができるという点で重要な役割を担っていると考える。家庭・地域との連携を深め、ふれあいを大切にしたり取り組みを行うため、学習や体験後の生徒の変容や感想を保護者会で話題にしたり、学校通信・学級通信などに掲載し、保護者の感想意見も掲載したりするなど、交流しながら育んでいきたいものである。

高木慶子は「『命の大切さ』を実感させる教育でアクセントを置くべきなのは「命」と「実感」である。実感は心が動く「感動」が糸口となる。実感することで初めて自分のものとなるのである。」<sup>7)</sup>と語っている。今回の取り組みは、少なからず生徒たちの心を動かしている。こういった取り組みを少しずつ積み上げていくことによって、「命の大切さ」を確かに生徒たちの心に刻み込むことができると考える。

実践を進める中で、学校全体で共通理解を進めていくことが大切であるが、本中学校では、道徳教育を基盤として計画的な取り組みがなされている。限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科などを連携させて、どのように進めていくかが課題である。生徒の心を動かす教材や体験の中で、少しずつではあるが、「いのち」を尊重する心は養われていく。その思いを持続させ、より深めさせていくためにも、年間を見通した計画的組織的な取り組みが必要である。1時間の授業が単独に行われるのではなく、年間カリキュラムの流れに沿って行われ、発達段階を踏まえ、年齢に即した内容の教育を計画し実施していくことが望ましい。

今回、作成することが出来たカリキュラムが各学校の年間計画作成の一助となることを願っている。今後、学校教育に長年携わってきた者として、人間教育の基盤となる「いのち」に関わる教育をより深めていくために、微力ではあるが支援にあたっていきたいと考える。

## 引用・参考文献

- (1) 文部科学省「～子どもの「命」を守るために～」2012
  - (2) 梶田叡一「『人間教育』とは何か」人間教育学研究創刊号 人間教育学会 2014
  - (3) 梶田叡一「なぜ<いのちの教育>なのか」人間教育研究協議会 『いのちの教育(教育フォーラム 44)』金子書房 2009年  
梶田叡一「<いのち>の自覚と教育」株式会社 ERP 2010年
  - (4) 兵庫県教育委員会 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言(第1版)』2005
  - (5) 兵庫県立教育研究所「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム」2006
  - (6) 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」<いのちの教育部会研究報告書>  
2012年度～2014年度科学研究費補助金(基盤研究B) 課題番号 24330254 2015
  - (7) 高木 慶子「命の大切さ」を実感させる教育についての有識者からの意見
- ・ 2007年「『命の大切さ』を実感させる教育への提言において」より
  - ・ 文部科学省「中学校 学習指導要領」2008